

革命前ロシアの民衆読書教育と国民意識形成

——1870年代から20世紀初頭——

貝澤 哉

はじめに

本稿の目的は、1870年代から20世紀初頭のロシアにおける民衆^{ナロード}への文学読書¹普及プロセスを概観し、その過程のなかで文学にどのような機能が与えられたのか検討することである。なかでもとりわけ注目したいのは、読書普及をとおして民衆のなかに国民意識が形成される過程のなかで、文学が果たした重要な役割である。

この時代のロシアでは、それまでの読書や文学の流通・消費形態を根底から変えるよう重大な変化がつぎつぎに起こっていた。新しい読者層の急速な増加、書籍への需要の急激な伸びと、安価な大量出版物の出現、アカデミックな文学研究の領域におけるロシア国民文学の古典的作品の規範化、² 中等学校カリキュラムにおける近現代ロシア文学の導入、³ 西欧における近代ロシア文学作品の大流行といった現象がそれだが、それらは相互に関連しあっており、複雑にからみあったこうした変化の全体的過程のなかで、ロシア文学は、ロシアの国民的アイデンティティの意識を形成するための非常に重要な要因となってゆくのである。

よく知られているように、ロシアでは、農村や都市の民衆に識字と読書をいかに普及させるか、という問題がとりわけ重要性をおび、さかんに議論されるようになったのは、いわゆる大改革期後のことであり、1870年代以降には、この問題を解決するためのさまざまな方策が、ゼムストヴォや政府、教会、民間組織や個人によって実践されていった。各種の初等学校、とくに民衆向けの私塾や日曜学校の創設、民衆図書館、読書室、書籍売店の開設、公開朗読会の開催や民衆向けの安価な刊行物の出版、民衆の識字や読者にかんする資料収集と研究などが、この時期に大きな規模で実行されてゆくことになるのである。

¹ 当時のロシアでは、「読書 чтение」という語は、個人による黙読だけでなく、朗読やそれを聴くことをも含んでいる。したがって本稿で「読書」と言う場合にも、それらの意味をすべて含むものとする。

² これについては、貝澤 哉「ロシアにおける『国民文学史』の形成：A.パイピンの文学史研究をめぐって」『比較文学年誌』第31号、1995年、65-78頁を参照。

³ 詳細は、貝澤 哉「19世紀後半から20世紀初頭のロシアにおける文学教育と文学の国民化：ギムナジアにおける文学教育カリキュラムをめぐって」『スラヴ研究』第53号、2006年、61-91頁を参照。

こうしたさまざまなタイプの識字・読書普及活動について検討するさい、私たちにとってとくに興味深いのは、ほとんどの場合、そうした活動のなかで、ロシア文学の作品にきわめて重要な役割が担わされているという事実なのである。民衆の識字・読書教育に携わっていた者たちは多くの場合、ロシア文学の作品を、識字・読書教育のために最適の教材と考え、どうにかして民衆に19世紀ロシア文学の古典的傑作を読ませようとさまざまな形で努めてきた。これらの人々の多くが、19世紀古典作家を中心とするロシア文学を、民衆の知的・道徳的発展のためにもっとも必要不可欠で有益な素材と考えていたのである。ロシアの古典作家を読むことは、たんに民衆の美的趣味を育てるだけでなく、民衆のなかに、ロシアの生活への興味や公民的・国民的意識を目覚めさせるはずだ、と彼らは確信していた。

ここで私たちがつきあたるのは当然、次のような疑問であろう。いったいいかなる理由で、またどのような経過で、ロシア文学は民衆教育の理想的素材とみなされるにいたり、民衆の識字・読書教育において特権的な地位を占めるにいたったのだろうか。どうして19世紀ロシア文学の古典的作家たちに、これほど重要で決定的な意義が与えられたのか。こうした作家たちのなにかが、一般民衆への読書普及にとってこれほどまでに必要だったのだろうか。

こうした疑問に答えようとする試みは、ロシア読書史の研究者たちによって、すでにさまざまな形でなされてきた。後に詳述するが、彼らは主として、ロシア文学の古典が極度に理想化された原因を、知識人たちがみずからの文化的価値を下層民衆に押し付けようとした権威主義的な志向にあると推測したり、また教養あるエリート層が、当時すでに国家国民統合の基盤としての力を失ってしまっていた専制や正教に代わって、19世紀ロシア文学を国民的アイデンティティの形成と強化のためのだれにでも受け入れられる新しい国民的基盤にしようとしたためだと考えている。

このような説明はそれ自体もちろん間違っているわけではないだろうが、完全に満足ゆくものということもできない。というのも、こうした説明では、教養あるエリート層が国民的アイデンティティの基盤として、なぜ、他の分野やジャンルを差し置いてまさに19世紀ロシア文学を選ばなければならなかったのかを完全に解明しているとはいえないからだ。この間に答えるためには、私たちは1870年代から20世紀初頭にいたるまでの時期にロシアで顕著になってきた他の重要な要因をも考慮に入れる必要があるだろう。それは、文学自体の生産と消費の形態の変化、文学作品そのものの大衆的普及、ポピュラー化や、その大量出版の拡大といった事態である。

そこで私たちは、民衆の識字・読書普及拡大プロセスを、おもにこの分野における当時の啓蒙・教育活動の資料やこの時代の読書・読者研究資料にもとづいて、具体的に検証してゆきたい。最初の節では1870年代の動きを概観し、とくに教育者オストロゴルスキーに注目して、民衆教育において文学が特別な役割を果たしているという彼の主張について考察する。次の節では、アルチェフスカヤによる浩瀚な資料集『民衆はなにを読むべきか』の刊行や「ポスレドニク」出版社の設立など、1880年代に起こった重要な出来事について扱う。ここではまた読書普及の活動家であったマラクエフの報告についても触れること

にするが、それは彼の報告がこの時代の雰囲気がある面であざやかに示しているからである。第3節で検討されるのは、プルガーヴィン、ルバーキン、アン...スキイ（ラポポルト）など、90年代以降における民衆読書の著名な研究者たちの仕事である。これらの研究はいずれも、当時民衆と文学のあいだの関係が大きく変動しようとしていたことを示している。そして最後の節では、民衆への読書普及におけるロシア文学の役割についての今日の文化史研究者たちの見解が、文学そのものの生産と消費の形態の変化という観点から再検討されることになる。

1. 70年代：V.P.オストロゴルスキイによる、民衆読書普及におけるロシア文学の位置づけ

すでに述べたように、ロシアでは、民衆への識字能力と読書の普及という問題が幅広い注目を集めるようになったのは1860年代、すなわち大改革期のことであった。すでに1861年にはモスクワに有益書普及協会が、ペテルブルクには自由経済協会付属識字委員会が設立されている。同年ドストエフスキイは「本と識字」と題する文章を発表したし、レフ・トルストイは民衆向けのパンフレット出版の最初の試みに着手した。その前年にはトゥルゲーネフもまた識字普及と初等教育にかんする独自のプログラム案を策定している。60年代をつうじて、農村に私設の識字学校を開こうとしたり、民衆向け出版物を刊行しようとする試みが数多く続けられていた。この時期に読み書き能力や書物を民衆に与えようとする志向が強力に、そして急速に広まっていたことは、たとえば1869年、国民教育省が学術委員会内部に、民衆への有害書普及を阻止するための特別委員会を設置したことなどからも間接的にうかがい知ることができよう。⁴

民衆のあいだに識字能力や読書を広めようとするさまざまな試みは、1870年代から1880年代にかけて、ますますその勢いを増していった。ナロードニキによる民衆啓蒙活動、ゼムストヴォやその他の機関による民衆図書室、識字学校、書籍販売所等の創設に向けた努力などが、民衆の読書をめぐる状況が急速に改善される方向へと事態を動かしたのである。たとえば1872年に、民衆の読者にロシアの一流作家の作品を紹介することを目的として、自由経済協会会員のイニシアティヴにより設立された「民衆出版社」は、当時の民衆読書の研究者であったS.A.アン...スキイ（ラポポルト）によれば、知識人の文学作品を民衆にもたらそうとする初めての試みだった。⁵ 二年後には、モスクワ識字委員会も民衆向け出版物の刊行を開始し、またモスクワの有益書普及協会には、民衆読書を組織するための常設委員会が設置されている。

民衆への書籍普及の問題をめぐり状況のこうした急速な変化に押されて、帝政政府も書物にたいする民衆のアクセスをより厳格に管理するための方策を採らざるを得なくなった。

⁴ 詳しくは *Блюм А. Система правительственной регламентации круга народного чтения во второй половине XIX в. // Книжное дело в России во второй половине XIX – начале XX вв. Сборник научных трудов. Л., 1983. С. 129 и далее.* を参照。

⁵ *Ан-ский С.А. Очерки народной литературы. СПб., 1894. С. 59.*

1876年12月には「県都における民衆読書会運営規則」が公布され、また1878年9月には、国有財産省、内務省、法務省、国民教育省などの政府機関が参加する「民衆読書向け書籍出版の問題にかんする特別会議」が招集されたが、そこでは「安価な刊行物の普及が大きな効用を持つことを満場一致でみとめながらも」、「それ[民衆]を悪意あるプロパガンダの影響から遠ざけるため」の方策を講じることが不可欠である、との議論がなされている。⁶

おなじ1878年に出版された書誌『ロシア民衆教育文献体系概説』は、民衆への識字と読書の普及においてロシア文学の古典的作家たちがはたした役割と機能を理解するうえで貴重な資料のひとつである。ペテルブルク識字委員会の委託によって製作されたこの本は、当時のロシアで出版されていた民衆の読書にとって有益な書籍を書誌という形で集成した最初の試みのひとつだった。『ロシア民衆教育文献体系概説』の出版が企てられたのは、当時「民衆向け教育文献が急速な伸びを見せ」、こうした文献にたいする「学校からの需要」が増大したためであった。⁷ この本の第二部は、文法および文学関係の書籍の書誌的記述にあてられているのだが、そこには、識字と読書の普及活動に従事していた者たちに典型的な観点が反映しているのを、きわめてはっきりと読みとることができる。この部分を編集したV.P.オストロゴルスキイは文学の教師として日曜民衆学校の活動に積極的にかかわり、識字委員会メンバーでもあり、民衆学校の生徒たちに近現代ロシア文学を教えるべきだと主張していることで知られていた。⁸

この第二部の冒頭に掲載されている「解説」のなかで、著者（そこには著者名は掲げられていないが、諸般の状況から見て、オストロゴルスキイの筆になるものであろう）は、子供の教育や言葉の習得において文学が持つ特別な意義を幾度となく強調し、文学作品からの例が多く掲載されている撰文集を高く評価し推薦しており、こうした立場から、たとえば著名な教育者ウシンスキイの有名な撰文集『子供の世界』を、文学の用例が少ないとして批判した。彼は、民衆学校の教師は文学教育を受けていなければならないとさえ主張している。というのも、「文学作品は、人がある生き方をするのはなぜ、いかにしてなのかを私たちに手に取るように見せてくれる、あるいはおなじことだが、私たちに人生を教えてくれる」⁹ のであり、「こうして文学教育は、一方では私たちに、じつにさまざまな種類の人々の内的、個人的な人生を、例を使って説明し、また他方では、私たちが美的に発育させてくれる、つまり、美、善、真の概念を涵養してくれるのである [...]」¹⁰。著者

⁶ Кельнер В. Правительственные издания для народа и их читатель в годы второй революционной ситуации // Чтение в дореволюционной России. Сборник научных трудов. М., 1992. С. 68.

⁷ Краткий обзор деятельности состоящего при Императорском вольном экономическом обществе Комитета грамотности за время от 1861 по 1894 год. СПб., 1895. С. 12; Миропольский С. (сост.) С.-Петербургский комитет грамотности, состоящий при Императорском вольном экономическом обществе. (1861–1881). СПб., 1881. С. 11.

⁸ オストロゴルスキイの教育観については、浜本純逸「オストロゴルスキイの文学教育論：19世紀ロシア文学教育史研究(4)」『神戸大学教育学部研究集録』第68集、1982年、9–19頁、を参照。

⁹ Систематический обзор русской народно-учебной литературы. СПб., 1878. С. 175.

¹⁰ Там же. С. 176. [強調原著者]

の考えによれば、民衆学校の教師は「伝道師」なのであり、たんに知識を広めるだけではなく、民衆のなかに「善と真のいちばんのはじまりとなる原理の種を蒔」かなければならず、それによって民衆を「でき得る限り人間らしくするように努めなければならない」のだが、「この人間化が完遂されるのは、第一に民衆の養育それ自体によってであり、第二に、学校や、可能なら集会や大衆向け茶屋、図書室において、読書させ討論させることによってであるが、こうした読書・討論の普及はわが国では緊急で欠くべからざる事業なのである」¹¹。

ここに引用した例からもあきらかなように、著者（オストロゴルスキイ）は、文学が、人間的感情の形成に影響を及ぼすような大きな感化力を持っていると考えていた。彼にとって文学作品が民衆学校においてきわめて重要なのは、たんにそれらが読み書きや読書教育のための実践的教材として利用できるからではなく、こうした文学作品がその美的な力によって民衆の心に深く作用し、民衆の倫理的、道徳的、美的感情の発達を促す力を持っているからなのである。

さらに私たちがとくに注目すべきなのは、ここでオストロゴルスキイが文学のこうした強力な美的作用を人間的感情の発達と結びつけているだけでなく、それを国民意識の覚醒とも結びつけようと試みている事実である。

読書をつうじて農民の人生を、神や家族への態度のなかで意味づけたならば、農村社会に対する、《世界》に対する農民の態度にも立ち止まってみなければならない。農民はその世界の一員であり、政府が彼にあたえたまさにその権利にしたがって、農民は世界の利益を保持し守る義務がある。ここから、法律の尊重へと移行するのはすでに自然なことであるし、最後には、愛すべきものであり、また必要とあれば最後の血の一滴まで守らなければならない祖国、母国そのものという概念の尊重にいたる。¹²

このように、国民的感情の強化と意識化にとって文学作品を読むことがきわめて重要であることを示唆するとき、オストロゴルスキイが念頭に置いていたのは、ロシア文学の古典的作家、とりわけ、プーシキン、ゴーゴリ、レールモントフなど、19世紀ロシアの著名な作家たちであった。彼は次のように述べている。

後者〔民衆向け教員〕はわが国の文学の偉大な天才たちの作品をしっかりと知悉していなければならない。プーシキン、ゴーゴリ、レールモントフ[...]はあらゆるロシア人にとって文学教育の基礎をおいたのであり、教師のように民衆の啓蒙者になろうとする者にとってはなおさらである。¹³

このように、オストロゴルスキイにおいて、19世紀ロシア文学の作品を読むことは、民衆学校の識字教育にとって最重要の課題であるとともに、生徒たちの国民意識や母国、祖

¹¹ Там же. С. 175–177.

¹² Там же. С. 185.

¹³ Там же. С. 180.

国への感情を育てることと強く結びつけられていた。識字委員会の著名な活動家の口から発せられた、ロシア文学の役割についてのこのような理解は、私たちの見るところ、偶然のもの、例外的なものとはとても考えがたい。なぜならこのすぐ後、1880年代になると、19世紀ロシアの作家たちが民衆への識字教育や読書普及に対して持つ意義は、この分野で活動した多くの者たちによって、広く認められてゆくことになるからだ。こうした人々にとっては、議論の中心を占めることになるのは、19世紀ロシア文学の古典的名作に民衆の注意を向けるにはどうしたらよいか、ロシア文学のどの作品が民衆に読ませるのにより適しているのか、こうした作品をどのようにして、またどのような形で民衆に供給したらよいか、民衆には、民衆向けに特別に作られた文学作品やリライトされた作品を与えるべきなのか、それとも古典的作品をオリジナルのまま読ませたほうがよいのか、という問題であった。

そこで次節では、1880年代における民衆読書の普及活動と研究活動を概観し、その代表的な人物たちがロシア文学の意義をどのようにとらえていたのか検討してゆくことにしよう。

2. 転換点としての 1880 年代：民衆が文学を理解できるかどうかにかんする論争。Kh.D.アルチェフスカヤと V.N.マラクエフの活動と見解

民衆への識字能力や書物の普及活動にとって、1880年代はさまざまな意味で大きな転換点となったと言えるだろう。この時期の重要な出来事として銘記すべきなのは、ハリコフ民衆日曜学校の Kh.D.アルチェフスカヤをリーダーとする女教師たちによって 1884 年に出版された浩瀚な著作『民衆はなにを読むべきか』第 1 巻と、同年、レフ・トルストイや著名な出版業者スイチンも参加し、民衆のための安価で良質な出版物を刊行する目的で設立された「ポスレードニク」出版社の出現である。

とりわけアルチェフスカヤの本には、民衆学校の教室での読書会とその後の生徒たちによる討論の膨大な記録が収められており、民衆の読書行動にかんする貴重な資料集と見なされた。というのもこの本は、ロシアにおいて民衆の読書行動を直接的な一次資料にもとづいて研究したはじめての試みだったからだ。¹⁴ 世に出るとすぐに、『民衆はなにを読むべきか』は民衆教育に携わる人々から数多くの反響を得ることになったが、そのほとんどは肯定的なものであった。たとえば、N.シェルグノフは当時の反応を次のように述べている。

1884 年に『民衆はなにを読むべきか』の第 1 巻（50 全紙の分厚い本）が出ると、わが国の知識人たちの頭のなかでは、あたかも小さな地震が感じられたかのようなだった。あらゆる新聞雑誌や、わが国の尊敬すべき学者たちのうちの幾人かできえ、ハリコフの女教師たちの書物に狂喜

¹⁴ См.: Коган В. Из истории изучения читателей в дореволюционной России // Проблемы социологии печати. Вып. 1. Новосибирск, 1969. С. 37.

せんばかりだった。¹⁵

こうして、アルチェフスカヤの本は民衆への読書普及のその後のゆくえに大きな影響をおよぼすことになった。翌 1885 年、D.I. シャホフスコイをリーダーとするペテルブルク大学の学生グループが、ロシアで史上初めての民衆読者にかんする研究プログラムを発表した。またモスクワではこの年、最初の無料民衆図書室である、I.S. トゥルゲーネフ記念図書館が開館した。1886 年には「ポスレドニク」出版社編集部が読者研究のための二つの質問集を刊行し、回答を編集部に送るよう人々に要請した。1887 年、ナロードニキの傾向を持ち旧教徒の研究でも知られる評論家 A.S. プルガーヴィンが「ロシア思想」誌上に、「民衆はなにを読み、学校や書物をどう見ているかについての情報収集のためのプログラム」を掲載した。同年ペテルブルクでは初めて、二つの無料図書室が設立されている。またこの年のはじめには、詩人 A.S. プーシキンの著作権が期限切れとなり、著名な出版業者 A.S. スヴォーリンによって刊行された安価なその著作集が、発売から一時間後には完売するといった事態も起きた。この年だけでプーシキンの作品は約 150 万部も出版され、アン...スキイの推定によれば、そのほとんどが民衆の読者の手に渡ったという。¹⁶ 1888 年、モスクワで第二の民衆図書室が活動を開始し、「ロシア思想」誌編集部が民衆向け出版物の刊行を開始した。1889 年には『民衆はなにを読むべきか』第 2 巻が上梓され、その功績によりアルチェフスカヤはパリ万博でメダルを授与された。また同年、民衆啓蒙教育活動に積極的にたずさわり、書物研究者としても知られている N.A. ルバーキンが「ロシアの富」誌上に「民衆向け文学の研究のためのプログラムの試み」を発表している。

アン...スキイは民衆読者研究にかんするみずからの著書のなかで、民衆への読書の普及事業にとって 1880 年代が大きな転換点であったことを幾度となく強調しているのだが、彼によれば、1870–1880 年代のきわだった特徴は、民衆のなかに「知識人の」文学を広めようとする志向だったという。それ以前の時代には、知識人の高級な文学は民衆には敷居が高い、あるいはたんに理解できないし必要もないという考えが大勢を占めていた。たとえば、ドブロリューポフやピーサレフは、プーシキンもレールモントフも民衆の世界観に占める場所を持たないと主張していたし、70 年代にはすでにオストロゴルスキイのように、19 世紀ロシア作家が民衆教育の事業にとって大きな意義を持つと考える者もいたが、それでも N.K. ミハイロフスキイやスカビチェフスキイのように、ロシア文学を民衆のなかに根づかせる可能性を認めようとしないうる者も存在したのである。¹⁷

よく知られているように、当時読み書きのできる民衆のあいだで普及していたのは、いわゆるルボーク文学であり、その生産と消費の商業的で市場的な性格や、大衆的で娯楽的な内容から、教養層の人々の目には、そうした文学は民衆の教育にとってたんに不適切で

¹⁵ Шелгунов Н. Очерки русской жизни // Русская мысль. 1890. Кн. 10. С. 211. [強調原著者]

¹⁶ Ан-ский. Указ. соч. С. 13. Также см.: Пругавин А.С. Запросы народа и обязанности интеллигенции в области умственного развития и просвещения. М., 1890. С. 195–197.

¹⁷ См.: Ан-ский. Указ. соч. С. 65, 75–80; Ан-ский С.А. Народ и книга. (Опыт характеристики народного читателя). М., 1914. С. 11–18, 30.

あるだけでなく、有害なものさえ見なされていた。民衆に与えるべきなのはオリジナルの文学作品なのか、あるいは民衆向けに特別に書かれた文学なのか、というこの時代に流行した論争も、もともとは一般庶民をルボーク文学の有害な影響から守ろうとする知識層の意図のもとに生まれたものであった。しかし、ルボーク文学を他の種類の本、とりわけ19世紀ロシア古典作家の作品によって駆逐しようとするゼムストヴォ、ナロードニキその他の教養層の代表者たちによるさまざまな試みはすべて、1880年代までは成功することはなかったと言ってよい。

ところが、1880年代に入り、アルチェフスカヤの『民衆はなにを読むべきか』が出現し「ポストレードニク」出版社が設立されると、状況は根底から一変する。とくに、アルチェフスカヤの本は具体的な事例を掲げて、実際に農民出身の生徒たちがプーシキン、ゴーゴリ、トルストイ、さらにドストエフスキイといった作家さえも十分理解できることをはっきりと示した点で画期的なものであった。トルストイ自身の作品も含む「ポストレードニク」社の刊行物もまた民衆のあいだに浸透することに成功したが、これは、一流作家の作品が市場で民衆本の競争相手として登場したロシア初の例となったのである。¹⁸

『民衆はなにを読むべきか』から、教室での朗読会の例を引用してみよう。トゥルゲーネフの『ムムー』の朗読は次のように行われた。

子供たちの注意は、最初の頁からゲラシムとムムーにすっかり釘付けとなった。どうやら、非常に興味を持って聞いているようだ。だが発言は少ない。農村の子供はそもそも寡黙なのだ。そのかわり、内容を伝えなければならなくなると、彼らはそれをほんとうにすばらしく伝えた。どんな細かい部分も抜かされることはなかった。子供たちは作品をそらで覚えたのかと思えた。 [...]

朗読の後、生徒たちと内容について討論が行われた。

質問1 この出来事があったのは昔だと思いますか。——「ぼくは昔、農奴制のときだと思う」と男の子の一人が答えた。「どうしてそう思うの」「だって彼女はゲラシムをもとの道に戻そうとしたけど、自由だったら戻せないもの！」

質問2 自由な人間だったとしたらどうしたでしょうか。——「ゲラシムは自分から逃げて、犬も持っていったはずだよ」と一人が答える。「裁判に訴えていただろう」もう一人が言った。「犬のことでかい？ でもゲラシムが自分で溺れさせたんだぜ」と悲しげにもう一人が付け加えた。「ぼくはこれは農奴制廃止の後だと思う」とボンダレンコが割って入った [...]¹⁹

読書史の研究者たちのなかには、農民の子弟たちに古典文学が理解できることを証明し

¹⁸ Jeffrey Brooks, *When Russia Learned to Read: Literacy and Popular Literature, 1861–1917* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1985), p. 337. Также см.: Некрасова Е. Народные книги для чтения в их 25-летней борьбе с лубочными изданиями // Северный вестник. 1889. № 7. С. 11.

¹⁹ Что читать народу. СПб., 1884. С. 57, 59.

たいがために、アルチェフスカヤがことさら文学作品を前面に出し、また演出を加えているのではないか、とする批判的見方も当時から存在していたが、²⁰ いずれにせよ、こうした記述が、先に引用したシェルグノフの文章に見られるような熱狂的な反応を当時の言論界におよぼしたことは確かであろう。

こうした記録を数多く掲載したアルチェフスカヤの著書が刊行された後には、ロシア文学の古典的作家の作品は民衆に十分理解でき、したがって民衆向けに特別に作られた文学は必要ないという考え方が大勢を占めるようになった。もちろん、たとえばアン...スキイのように、とりわけ急進的なナロードニキを中心に、民衆のための特別な文学の必要性を主張し、アルチェフスカヤの仕事に批判的態度をとる者も当然存在してはいたのだが、それでも、このような観点は、E.ネクラソヴァ、V.デヴェリ、V.マラクエフ、ルバーキン、プルガーヴィンなど、民衆への読書普及活動や民衆読者研究に携わる著名な人物たちから幅広い支持を得ていたのである。

たとえば、女性教育の普及活動でその名を知られているE.ネクラソヴァは、ロシアの古典的作家の作品が民衆にとって有益であるのは疑いないと考えていた。彼女は次のように書いている——「祖国の詩人たちの偉大な作品でないとしたら、なにが民衆の芸術的趣味をよりよく涵養し発達させるというのだろうか」²¹。しかし1880年代に、ロシア文学の古典に対するこのような観点をより明確に断固として表明したのは、出版業者、書籍販売業者であり、民衆読書の普及に熱意を注ぎ、1882年には「民衆文庫」という出版社を創設したV.N.マラクエフであった。1884年9月9日、モスクワの工科博物館で行われた「ロシア民衆はなにを読んできたか、なにを読んでいるか」と題された公開講演（この題名がアルチェフスカヤの『民衆はなにを読むべきか』を意識してつけられたことはあきらかであろう）において、マラクエフは民衆を極端に理想化された姿としてとらえ、さらにそれを直接ロシア文学の古典作家たちの価値と結びつけようとする。

民衆はその物の見方において真なるリアリストであり、民衆には言葉よりおこないがより重要であるが、こうしたおこないのなかに民衆は、真の永遠なる知恵の結果であるおこないと、「この世の賢者たち」の知恵、その文明の知恵の結果であるおこないとを、つねに見分けることができる。 [...]

『イーリアス』は真に天才的であるが、それは民衆の創造物である。ロシア文学は、真なる美と知恵の真なる偉大さを、ネストルのような代表者たちのなかに現している。ネストルはその年代記をほとんどの場合民衆の言葉からそのまま書きとめていたのである。

その後期作品におけるプーシキンの簡素さと偉大さは、言葉においても思想においても、こ

²⁰ См.: *Лекаренко Д.* Из истории изучения читателя в дореволюционной России. — *Х.Д.Алчевская // Труды Московского государственного библиотечного института.* М., 1938. С. 106; *Банк Б.В.* Изучение читателей в России. XIX век. М., 1969. С. 99–109.

ウクライナの歴史家ヤロスラフ・フルイツァク氏によると、アルチェフスカヤによる資料の選択は客観的とはいえないものだった。こうした資料はしばしば、民衆の文学理解能力を証明するために恣意的に作り変えられていたという。フルイツァク氏の貴重なご教示に感謝したい。

²¹ *Некрасова.* Указ. соч. // *Северный вестник.* 1889. № 6. С. 7.

の古い民衆の言葉の簡素さと偉大さへの回帰なのである。²²

彼によると、ロシアの古典的作家たちの天才的作品は、すでにあまりに強く、直接的に「天才としての民衆」と結びついているので、民衆向け文学などそもそも必要ない。「現代のわが国の民衆向け文学、わが国のナロードニキたち（最近のいわゆる民衆向け文学——もちろんわれわれのためのものだが——を創出した者たち）すべての偽りは、民衆に対して偏見に満ちた、直接的でない傾向的態度にある」²³。ここから導き出されるのは、「農夫、村人を、どんなものでも理解可能な人間と見なすべきである」²⁴ という結論であった。

全体として、マラクエフの観点は民衆を理想化しすぎており、民衆には古典的文学が完全に理解できるはずだという極端に素朴な信念に基づいている。だがそれでも、ロシア古典作家たちの作品が民衆にふさわしいというこうした信念は、民衆への識字・読書教育の研究者や普及活動家たちのあいだに一定の影響を与えてきた。多かれ少なかれ、このような信念は90年代以降も彼らのあいだで共有されてゆくことになる。

もっとも、この時代に古典的作家が民衆にとって身近なものになっていった原因は、すでにこうした信念や民衆の理解力だけではなかった。90年代には、文学の生産・流通・消費の形態そのものが変貌しつつあり、「知識人の文学」、「民衆向け文学」といったそれまでの区別自体が意味を失いつつあったのである。

3. 90年代およびそれ以降：プルガーヴィン、ルバーキン、アン…スキイの民衆読書研究。「民衆」に代わる読者大衆の出現と、文芸作品の大衆出版物化

ロシア初の民衆読者研究の試みと言われるアルチェフスカヤの本が出版された後、90年代に入ると、著名な研究者たちによる民衆読書にかんする注目すべき研究が次々と姿を現すようになる。A.S.プルガーヴィンの『知的発達と教育の領域における民衆の要求と知識人の義務』（1890）、N.A.ルバーキンの『ロシア読書大衆についての試論』（1895）、S.A.アン…スキイの『民衆文学概説』（1894）と『民衆と書物（民衆読者の性格づけの試み）』（1914）などがそれである。

急進的なナロードニキで、民衆向け文学の擁護者であったアン…スキイを除いて、多くの論者が、原則として、民衆には知識人の文学が十分理解できるという立場を支持していた。たとえばルバーキンはその『ロシア読書大衆についての試論』のなかで、「民衆に必要なのは民衆本ではなく、安価な本である。というのも民衆は貧乏だがバカではないからだ」と述べ、アン…スキイの観点を批判しながら、民衆向け文学を「児童文学」と混同しないよう警告している。²⁵ またプルガーヴィンは、アルチェフスカヤの仕事の意義を手放

²² *Маракуев В.Н.* Что читал и читает русский народ. М., 1886. С. 12. [強調原著者]

²³ Там же. С. 15.

²⁴ Там же. С. 37. [強調原著者]

²⁵ *Рубакин Н.* Этюды о русской читающей публике. СПб., 1895. С. 142–143.

しで認めていたわけではないが、それでも、レフ・トルストイやプーシキンなどの著者に対する民衆の興味の急速な増大を念頭において、民衆に有益な良書を読む可能性を与える必要性を強調している。²⁶ 彼は書いている——「芸術的性格の書籍を刊行するさいには、主として、わが国の最良の純文学作家全員の作品を、民衆が手ごろな値段で買うことができるようにしなければならない」²⁷。

教育者で、ペテルブルク識字委員会の活動家でもあった V.V.デヴェリは、都市・農村の民衆向け図書館および読書室にかんする報告書のなかで、やはり次のように記している——「ロシアや外国の作家たちをリライトしたものは読まれることが少ない」²⁸、「民衆向けに特別に刊行された短篇や中篇小説は、より読むことになれた読者にとっては、いわば、ほとほとうんざりであった。こうした本にたいしては抗議する試みもあったし、場所によってはこうしたパンフレットの借り出しが拒否されることもあった」²⁹。アン...スキイが 1894 年に出版された自らの著作のなかで書いているように、「この 10 年、われわれが見てきたように、民衆文学について、作家たちはほとんどみな、知識人の文学が農村にとって受容可能であり必要で、完全に適合していることを、声をそろえ、断固として認め、この問題について、トルストイの記事も、ドブロリューポフ、ミハイロフスキイ、スカビチェフスキイなどの名も一度としてとりあげなかった」³⁰。

しかしながらそのことは、こうした著作の著者たちが、たんにマラクエフのように極端に民衆を理想化していたことを意味するわけではない。プルガーヴィンやルバーキンの著書は、彼らが 1887 年と 1889 年に発表した民衆読者研究プログラムに基づいて集められた事実の膨大なデータと資料を詳細に検討した結果であり、したがって彼らの見方の基底にあるのは、民衆読書をめぐる現状の比較的客観的な分析と、多かれ少なかれ具体的な事実をもとにしたその解釈なのである。

文学作品は民衆に十分理解可能なものだと彼らが考えたことを理解するためには、まず次のような事実に注意を向ける必要があるだろう。第一に、すでに 1880 年代から始まり、1890 年代以降にとりわけはっきりしてくるのだが、この時期には「民衆」という概念そのものがそのアクチュアリティを急速に失って、さまざまな階層やグループへと解体していき、そのため「民衆文学」一般について語るものが困難になってゆくこと、第二に、教育程度の高くない読者大衆による、古典的文学作品への需要の急速な増加と、それにともない古典的作家の作品が大衆化され、民衆本市場に流通する大衆的で安価な刊行物へと変化していったこと、これらが、高級な文学と民衆文学の境界をかなり不明確で曖昧なものにしていったのであり、それによって、「教養ある読者層」と「民衆読者」という硬直した古い二分法は事実上その意味を失ってゆくことになる。

上述のオストロゴルスキイやマラクエフの発言には、「民衆」という語の明確な定義は

²⁶ Пругавин. Указ.соч. С. 195–201.

²⁷ Там же. С. 256.

²⁸ Девель В. Городские и сельские библиотеки и читальни для народа, по сведениям Петербургского комитета грамотности. СПб., 1892.

²⁹ Там же. С. 58.

³⁰ Ан-ский С.А. Очерки народной литературы. СПб., 1894. С. 90.

なされていない。彼らにとってこの語は一般に、教養がなく、多くの場合読み書きのできない農村出身の下層民を漠然と示していたが、それを明確に定義する必要性はこの当時感じられなかったのであろう。アルチェフスカヤでさえ、「民衆はなにを読むべきか」と問うまえに、まず「民衆」とはなんであるのかを問うことはしていない。

ところが、1880年代末に「民衆向け文学研究プログラム」を作成していたルバーキンは、この問題に直面せざるを得なくなる。このプログラムに添えられた文章のなかで、ルバーキン自身「民衆向け文学」という概念が曖昧で不明確なものであることを白状せざるを得なかったのだが、その背景にあったのは、都市におけるあらたな下層民衆の出現という事態である。1880年代末から1890年代初頭には以前の農奴で解放後都市に移住した農村出身者たちが都市の下層労働者という別の社会層をすでに形成しはじめており、読み書き能力を獲得して、文学作品を読みはじめていたからである。そこでルバーキンは、「民衆」のなかに農民だけでなく、中等教育を受けていない者すべてを含め、それによってこの概念を都市下層民にまで大幅に拡大することで、この問題を解決しようとした。³¹

「民衆」という語のこうした曖昧さはアン...スキイにとってもまた本質的な問題となっていた。急進的ナロードニキだったアン...スキイにとっては、こうした元農民出身の都市下層民を、現在も農村に定着している住民とおなじ水準で語ることは不可能だったのである。そこで、この問題を解決するためにアン...スキイはルバーキンとは正反対の方向に進んだ。つまり彼は、「民衆」という概念を農民のみに限定し、「民衆向け文学」をもっぱら農村の下層民向けの文学だけに限ろうとしたのである。³²

あきらかに、「民衆」という概念についてのルバーキンとアン...スキイにおけるこうした正反対の考え方の背後にあるのは、この時代の全般的な状況であった。民衆の読者大衆がいくつかの異なるグループへと階層分化したことが、もはや「民衆」をひとつの統一したまとまりとして捉え、定義づけることを困難にしていた。下層民からなるこのような新しい読者グループの出現は、1880年代後半に「ポスレドニク」出版社の出版物が民衆のあいだに広く浸透しはじめたときに、すでに感じられていた。1887年のあいだだけでプーシキンの作品のさまざまな廉価版が約150万部も刊行されたことも、そうした例のひとつなのだろう。³³しかし、こうした現象がとくに顕著になってくるのは90年代になってからである。1893年にはすでにルバーキンは、さまざまな図書館の統計資料の調査にもとづいて、読者大衆が多様なグループに分化していることを指摘していた。³⁴もっと後に書かれた論文のなかでも、ルバーキンは次のように述べている。

³¹ Рубакин Н.А. Опыт программы для исследования литературы для народа. СПб., 1889. С. 286, 292.

³² Ан-ский. Очерки народной литературы. С. 13–14.

³³ プルガーヴィンは、この150万部でさえも、プーシキンに対する当時の需要のすべてを満たしてはいなかったらと推測している。См.: Пругавин. Указ. соч. С. 197.

³⁴ Рубакин Н. Книжное оскудение. К характеристике читателей из привилегированных классов // Русское богатство. 1893. № 12. С. 116.

民衆に近いところにいる人々は、1888-1889年に、新しいタイプの読者の出現と増加を、すでに幾度となく確認していた。この後者はいずこかに生まれ、粘り強く執拗に自分自身の思いを温めながら、いずこかで成熟していたのだ。その増加は1889年からあらわになった。この年、書籍の刊行量はすでに1888年より多くなった。部数は18,777,891にまで増加した。³⁵

彼は、このような新しい積極的な読者グループの出現の原因を、都市の、とりわけ工場労働者のあいだでの識字人口の急激な上昇にあると見ていたが、この事実そのものが、新しいタイプの読者の出現が可能になったのは、まさに「民衆」がさまざまな読者グループへと階層分化してしまった結果であることを鮮やかに示している。

民衆がいくつかの読者グループへと分解し、読書に対して積極的なグループが成長してきたことは、当然ながら書籍需要の急速な増大をうながすはずである。ルバーキンもその著作のなかで、この時期に読者数が拡大し、書籍に対する需要が大幅に伸びたことを繰り返し指摘している。彼は「書籍への需要の増加は識字率の上昇より急速ですらある」とまで主張し、そのことから、「こうした需要の結果が（そして、逆にそれはその原因でもあるのだが）書籍市場における廉価出版物の氾濫なのである」と結論づけている。³⁶

ルバーキンのこうした発言がとりわけ私たちの興味を惹くのは、彼にとって文芸作品もまたその例外ではなかったからである。実際、19世紀末における新しいタイプの積極的な読者大衆の成長と書籍需要の急速な増大は、ロシア文学の古典的作家たちの作品が、安価な大量出版物となって書籍市場に出現するきっかけともなった。たとえば1890年にプルガーヴィンは、ロシアの古典的作家たちの作品がルボーク本のなかに現れたことを報告している。ルバーキンもまた、ある論文のなかで、スイチン、ランプ、ポタポフ、スヴォーリンといった出版業者たちの安価なロシア文学の出版物にふれ、さらにルボーク文学に、ゴーゴリ、プーシキン、ザゴスキ、レールモントフ、コリツォフなどの「優れた作家たち」の作品が出現したことに注意をうながしたうえで、次のように結論づけている。

[...] 近年、民衆出版物部門と「ルボーク」出版物の部門のあいだの境界があまりに均されてはっきりしなくなってしまったので、圧倒的多数の場合には、書物をこの二つの部門に多少なりとも誤りなく分類する可能性はまったくない。³⁷

こうして、どちらにもロシア文学の作品が（もちろんリライトされた形でだが）含まれることにより、この時代には、教養層が作る民衆向けの出版物とルボーク本の境界はきわめて不明確なものとなっていた。しかも、彼によれば、境界のこうしたゆらぎは、民衆向けの出版物とルボーク本のあいだだけの話にとどまらない。さらにルバーキンはこう主張するのである。

³⁵ Рубакин Н. Книжный поток. Факты и цифры из истории книжного дела в России за последние 15 лет // Русская мысль. 1903. Кн. III. С. 6.

³⁶ Рубакин Н. Этюды о русской читающей публике. С. 141. Также см.: Рубакин Н.А. Русские читатели и их обстановка // Вестник знания, 1905. № 1. С. 176.

³⁷ Рубакин. Книжный поток // Русская мысль. 1903. Кн. XII. С. 176-179.

[...] 時とともにあいまいになってきたのは、「ルボーク」本と「廉価」本の境目だけではない——おなじ現象が、作者や出版者たちによって「民衆向け」に作られた書籍部門と「教養層読者向け」書籍とのあいだにも見られる。なによりまず完全にこうした境界線が消えてしまったのは、小説 *беллетристика* 部門においてである [...]。³⁸

つまりルバーキンの意見では、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてのロシアにおける新しい読者大衆の増加と大量出版物への需要の急激な成長は、とくに「小説・読み物」の部門で、ルボーク本と民衆向け文学のあいだの境界だけでなく、エリートの文学と民衆向け文学のあいだの境界も曖昧にし、両者の差を見えなくしつつあった。そのことが意味するのは、この時代のロシアにおいて、文学作品が事実上あらゆる読者層にとって比較的簡単に手に入る消費の対象となり、したがってまた、その内容も理解可能なものになったということである。ここで見逃してはならないのは、ルバーキンにとって、こうした現象があらわれたのは、民衆向け文学の普及活動家たちや民衆学校の教師たちが民衆を高級な文学のレベルに引き上げようと努力した結果というより、むしろ知識層の文学それ自体が、廉価な民衆出版物やルボーク本のレベルまで下降しようと努めた結果である、という点である。

このことは彼の次のような言葉のなかにはっきりと見てとることができる。

鳴り響くのは、文学の貧困化、最良の作家たちの最良の作品の群集への影響力の低下という声である。群集は毎日のように街なかに「たんまりと」投げ出される文学的層ですっかり満足しているのだから。こうした声は正しいのだろうか。文学が影響する領域が変わったのではないだろうか。重心が、ある社会グループあるいは層から別のものへと移動したのではないか。³⁹

彼にとって文学史とは「読者のあいだで人気を獲得する」ための闘いの歴史であり、⁴⁰ この意味で古典的な文学がルボーク本や民衆向け大衆出版物になったり、あるいは逆にルボーク本や民衆向け大衆出版物が古典文学化したりすることは、いわば当然のことであった。こうして、1880 年代末から、ロシアの古典的作家の作品は、非常に大きな規模で幅広く大衆的読者のあいだに浸透し、ロシアのあらゆる読者が共有しうる財産、文化的価値となっていく。19 世紀ロシア文学に、国民的アイデンティティ形成における特別な重要性をもたらしたのは、まさにこのような文学そのものの大衆化のプロセスだったのである。

4. 新しい国民的アイデンティティの基盤としてのロシア文学。大衆的消費のための廉価な生産物および全国民的財産としてのロシア文学

20 世紀初頭になってからも、ロシア文学の作品は、下層の人々への識字教育や読書普及

³⁸ Рубакин. Книжный поток // Русская мысль. 1904. Кн. VI. С. 165.

³⁹ Рубакин. Этюды о русской читающей публике. С. 4. [強調原著者]

⁴⁰ Там же. С. 1

のためのもっとも重要な教材でありつづけた。たとえば、民衆学校のある女性活動家は、その文章(刊行年は表示されていないが、内容などから 1900 年代に書かれたと推定される)のなかで、他の教師の言葉を引用しながら次のよう記しているが、ここには、文学を生徒の国民感情の覚醒や意識化のために利用しようとする典型的な例を見ることができるだろう。

「[...] 朗読のためのこの素材は、文学朗読に共通の諸課題から定められた諸目的のために、講師が利用することのできるすべてを、すでに使えるような形で提供する」。こうした課題として著者が考えているのは、全人類の道徳的生活の根源的基盤と原理を聞き手に知らしめることであり、彼らのなかに人間的感情や美的趣味を発達させることであり、とくにロシアの生活を知らしめ、公民感情を目覚めさせることである。⁴¹

しかし、なぜロシア文学はこれほどまでに民衆の教育にとって理想的な素材と見なされ、民衆の識字教育や読書の普及において前面に押し出されるのだろうか。それにそもそも、なぜ 19 世紀ロシアの古典的作家にこれほどの重要性が付与され、また彼らのなかが民衆への読書普及にとって有用なのだろうか。

すでにふれたように、ロシア読書史の研究者たちのある者は、ロシア文学の古典的作家が理想化された基本的な原因を、おもに、下層民に対してみずからの文化的な価値観を押し付けようとする知識人の権威主義的な志向や、19 世紀ロシア文学を、すでに国民統合の基盤としての力を失った専制や正教に代わる、国民的アイデンティティの意識化や強化のための新しい全国民的基礎にすえようとする教養エリート層の願望によって説明しようとする。

たとえば、帝政ロシア末期の公共図書館および民衆図書館の歴史を研究したマリー・スチュアートによると、当時図書館事業に従事していた者たちは、穏健なリベラルからナロードニキ、そしてマルクシズムにいたるまで、その政治的見解のいかんにかかわらず、ある共通する傾向を持っていた。「この傾向が [...] 示すのは、低い階層にたいして、教養エリートの文化・社会モデルを押し付けるという本質的に権威主義的な志向である」⁴²。この見方を考慮すれば、民衆への識字・読書普及においてロシア文学、とりわけ 19 世紀作家に与えられた重要な位置も理解できるようになるだろう。当時の知識人や教養エリート層にとって、19 世紀ロシア文学は、まぎれもなくエリート文化のもっとも価値ある成果であり、したがって教養層の代表者たちが民衆にロシアの古典的作家を読ませようと努めるのも、文化的エリートの「権威主義的衝動」、つまり知識層の文化の民衆への押し付けの特徴的なあらわれのひとつとして説明できるかもしれない。

ジェフリー・ブルックスの考えでは、ロシア文学が当時のロシア社会のなかでこれほど特別な地位を獲得した原因は、教養エリート層がそれ(とくに 19 世紀古典作家)を、国民的アイデンティティを意識化し強化するための、全国民的でだれにでも近づき得る新しい

⁴¹ *Реформатская Е.* Чтения и беседы в воскресной школе. Б.м., б.г. С. 48.

⁴² M. Stuart, "The Ennobling Illusion: The Public Library Movement in Late Imperial Russia," *The Slavonic and East European Review* 76, no. 3 (July 1998), p. 408.

基盤にしようとしたことにある。彼によると、

[...] ネーションの概念は、19世紀末のロシアでは執拗に維持されてきたとはいえ、多くの教養ある人々の観念のなかでは、彼らの理想に対立する、遅れた政治体制との連想を呼び起こした。ツァーへの忠誠、正教会との同一化、ロシアのナショナリティの伝統的象徴は、19世紀のあいだに、公民意識の基礎としては受け入れられないものとなった。こうした人々にとってナショナル・アイデンティティは、文化的アイデンティティに比べれば二次的なものとなった。

[...] こうした人々にとって魅力的だったのが、ナショナルな誇りの源泉としてのロシア文学である。⁴³

またこうしたことは、民衆学校の活動に携わる人々についてもあてはまる。

教養ある活動家たちのほとんどはナショナル・アイデンティティとしての文化的イデーを共有していたが、それはロシア文学の偉大な作品と結びついていた。[...] 彼ら[教師や読書普及者たち]が、ロシア的なもののシンボルとしてロシア文学の重要性を強調したとき、彼らが欲したのは、ナショナルな意識の新しい意味を、ツァーと正教会というポピュラーな同一化のオルタナティブとして奨励することであった。⁴⁴

19世紀ロシア文学とその創設者たちは、教師たちにとって、権威の源泉や教育素材という以上の何かであった。学校教師にとって文学の朗読はナショナル・アイデンティティの集団への参入を意味した。彼らには、自分たちがそうしたアイデンティティを分かち合ったのはより上層の階級だと思えたのだ。⁴⁵

こうした説明は、知識人論の観点から見た文化や思想的言説の研究としては、もちろん十分に根拠のある正しいものであろう。とはいえ、問題をこのようにとらえることは、民衆への読書普及における19世紀ロシア文学の特別な役割を理解するためには、必ずしも満足のゆくものではない。問題は、このような説明では、なぜほかでもない19世紀の古典的作家が専制や正教に代わる国民的アイデンティティの新しい基盤として選ばれたのかが、完全にあきらかになったとは言えない点にある。私たちが理解すべきなのは、なぜ教養エリート層が他の領域やジャンルではなく、ほかならぬ19世紀ロシア文学を新しいロシアの国民的アイデンティティの全国民的基盤に選ばなければならなかったのかということなのである。

⁴³ Brooks, *When Russia Learned to Read*, p. 317–318.

⁴⁴ *Ibid.*, p. 333.

⁴⁵ Jeffrey Brooks, “Russian Nationalism and Russian Literature: The Canonization of the Classics,” in Ivo Banac et al., eds., *Nation and Ideology: Essays in Honor of Wayne S. Vucinich* (Boulder: East European Monographs, 1981), p. 328. レイトブラトもまた、伝統的な宗教的世界観の危機を感じた者たちが、その代替品のひとつとして、文学を見出したのだと論じている。См.: *Рейтблат А. Предыстория массового чтения в России (конец XIX – начало XX в.) // Чтение. Проблемы и разработки. Сборник научных трудов. М., 1985. С. 110.*

そのためには、すでに指摘したように、1870年代から20世紀初頭にかけてロシアで進行した、文学そのものの生産・流通形態の変化、文学作品の大衆化とその大量出版化など別の要因をも考慮に入れる必要がある。この点でとくに私たちの注意を惹くのは、前節で論じたルバーキンの考察であろう。彼によれば、この時代の新しい読者層の成長と廉価な大量出版物に対する需要の急激な増大は、たんにルボーク本と民衆向け文学の境界だけでなく、民衆向け文学とエリートの文学のあいだの境界をも洗い流してしまった。少なくとも1890年代から1900年代のロシアでは、古典的な文学作品はすでに事実上あらゆる読者層にとって原則的にアクセス可能なものとなっていたことになる。実のところ、もしそうなのだとすれば、スチュアートやブルックスが言うように、教養ある層の人々が民衆をエリート文学のレベルにまで持ち上げようとどんなに努力したところで、それはすでに彼らが主張するほどには大きな意義を持っていないのではないか、ということになるだろう。というのも、この時代には文学そのものが民衆やルボークのレベルにまで降りようとしていたのであり、下層民の読者大衆は、ロシアの古典作家の廉価版やルボーク版を購入することができたからだ。実際この当時、民衆学校の教師たちは、自分が生徒たちに与えたいと思うよい作品が、国民教育省学術委員会のカタログによって教室で読むのを禁じられていることにしばしば不満をもらしていたが、実は民衆はそうした本を学校外の書籍市場で、安い値段で自由に手に入れることができる場合もあったのである。

ロシアでは、1880年代ごろから20世紀にかけて、文学趣味や作家への興味の領域においても大きな変化が起こりつつあった。1901年にA.ボグダノヴィチは「最近25年のあいだに、疑いもなく生まれたのは、過去には文学といかなる接点も持っていなかった階層から現れた新しい読者である」と述べた。⁴⁶このような読者は、彼によれば、分厚い書物ではなく、部数の大きな薄い本をより好む傾向がある。こうした場合には、読書における文学の特権性や権威はその基盤を失い、文学の占める地位は他の種類の書物とさほど大差ないものとなるだろう。事実、ジトミロヴァが報告するところでは、この時代に古典的作家たちは、中等学校の生徒たちの読書においては相対的にその役割を減じ、それに代わって、とくに自然科学系の通俗科学読み物への需要が高まっていたという。⁴⁷このような状況においては、ロシア文学はたんに、教養エリート層にとっての新しい国民的アイデンティティの基盤であっただけではない。より重要なのは、新たに出現した下層の読者大衆にとっても、ロシア文学はたしかに、あらたな全国民的財産となり国民共通の文化的価値となりつつあったという事実だが、それが可能となったのはむしろ、文学がその権威主義的な意味を失い、大衆的消費のための安価な娯楽へと急速に変化しつつあったからなのである。

もちろん、私たちが指摘したこうした現象の意味を、あまりに誇張しすぎるのは危険であろう。というのも当時のロシアには、いまだ本を読むことのできない膨大な数の下層民が存在していたし、知識人のあいだでのロシア文学の権威もゆるぎないものであり、まだ

⁴⁶ *Богданович А.* Критические заметки // Мир Божий. 1901. № 1. С. 3.

⁴⁷ *Житомирова Н.Н.* Читательские запросы и круг чтения учащихся средней школы предреволюционной России (конец XIX и XX начало века) // История русского читателя. Сборник статей. Вып. 2. Л., 1976. С. 71–72.

疑われてはいなかったからだ。だが、それでもやはり忘れてはならないのは、ロシア文学の古典的作品が、以前は文学に興味を持たなかったような社会層のなかに大量に普及し消費されるプロセスが始まったのが、まさにこの時代だったという事実である。まぎれもなく、このことこそ、19世紀ロシア文学の古典的作品が社会層を超えて全国的に普及し浸透するための大きな要因のひとつだったはずであり、いくら知識層がその文化的価値観を一方的に無理やり押し付けようとしたところで、文学そのものが大衆化し、一般民衆のありふれた娯楽や教養のひとつとして流通・消費される商品へと変貌してゆく下からのプロセスが存在しなかったなら、19世紀ロシア文学が全国民に共有される財産や価値として規範化されることもなかったはずなのである。

付記

本稿は科学研究費補助金基盤研究（C）「19世紀後半から20世紀初期ロシアにおける文学生産の場の社会史的研究」（2006年度、課題番号17520210）による研究成果の一部である。